共同農園「虹の邑（むら）」紹介

代表　長谷川　義仁

33 年前（1985 年）虹の邑は始まりました。精神障害者のカウンセラーやフリーターで暮らしていた 30 才すぎの前期中年者ら、数名が働きがいのある場所を（邑：ムラ＝くに）を創ろうと始めました。当時コミューン運動というのがありましたが、それに似たようなものを作ろうとしたわけです。邑（むら）の目的は①有機農業を広げる。②障害者などハンディキャップある人達が生きていける場をつくろう、でした。

（注）共同農園虹の邑規約　前文です。1988 年のものです。こんな思いで虹の邑を始めたのでした。

「現在の日本は、『自由』な社会である。人々の人権は憲法により保障され、おかされることなき権利としてある。
現在の日本は『平等』社会である。天皇を除いて総ての国民は平等に取り扱われる。
現在の日本は『民主主義』の社会である。権力者は国民の自由な合意によって生み出され、その権力の行使も国民の意思に基づきなされる。
　だが、この自由・平等・民主の社会の内実はどうであろうか。生まれながらにして、歴然とした貧富の差があり、その差を前提としての自由な競争がなされるのであるから、

この差別は拡大こそすれ、解消に向かうことはない。また、国民の合意により形成される権力も、金権政治と言われるように、金力ある人々によって占拠される。このことは選挙制度が富者に有利に、貧者に不利にできていること一つとても明らかである。

ところで、戦後日本社会は大きな変貌をとげた。とりわけ科学技術の発展と、それを利用した生産力の拡大には目を見張るものがある。それによって私達は便利になり、豊かになったと言われる。しかし、その豊かさの内実はどのようなものであろうか。

ガスで湯が沸き、電気でご飯が炊け、歩けば一日仕事の所へ車で簡単に往き来できるようになった。だが、その代償として、川は汚れ、海も汚れ、農薬漬けの有害添加物まみれの食品が氾濫することになった。・・(省略)・・・風光明媚な日本の自然はズタズタに切り刻まれ苦しみもがいている。

私達は、このような便利さ、豊かさに満足するわけにはいかない。否、このままの状況がこれからも続くなら、この文明の未来は滅亡しかないだろうと想像する。

私達は危機的未来に対して、警鐘を打ち鳴らすだけでなく、その危機を乗り越える方策を模索し、実践していこうと考える。自然と人間とがエコロジカルな関係で共存していける道、人間どうしが差別したり、収奪したり、排除したりせず、敵対せず共存していける道を模索し、実践して行きたく思う。

私達の運動は、現在の様々な問題を批判するだけでなく、これを乗り越える方法を、「今」、「この場」で具体的に具象化していこうとするものである。

共同農園『虹の邑』の建設は、自然と人間の共存、人間どうしの共存関係を具象化するひとつの場であり、そのような社会を作り出していくひとつの根拠地なのである。」

1985 年当時、農業は衰退してたとは言え、耕作する土地は簡単に手に入りません。虹の邑の協力者の、何年も耕作されてない山間部の農地の開墾から始まりました。太ももほどの太さの木や 2m を越すカヤを 7 月の暑い日々に汗だくになって掘り起こしました。まず、土地を肥やすために大豆を植え、味噌に仕込み、協力者に高値で買ってもらいました。数人が暮らしていける現金収入はそれだけでは足りませんので、教師など収入ある仕事についている人々の拠出金で、邑、専属メンバーの生計をまかないました。

大豆から始まった生産も、稲作、麦作へと作目を増やしていきましたが、経済的に自立には程遠く、専属メンバーもポツリポツリと邑（むら）を離れていきました。また、邑の仕事も農業仕事だけでなく、安全食品の共同購入グループ「善通寺暮らしを考える会」と提携・合体で、配送の仕事も加わり、代表である私が市議会議員をやるようになったりと、多様化していきました。

有機栽培で最も大変なのが雑草対策です。水稲は深水栽培から始めて、紙マルチ栽培、米ぬか除草、レンゲ直播き栽培、チェン除草と様々試み、現在はジャンボタニシ（スクミリンゴガイ）活用での水稲栽培です。また、麦作は無農薬栽培を 20 年ほど続けたのですが、

雑草を抑えることができず、十数年程前から、播種後に除草剤を散布する省農薬栽培に切り替えています。圃場には自家製堆肥の投入だけでなくソルゴーなどの緑肥を植えて、麦畑の排水をよくしたり、プラソイラーで耕盤を壊して排水に努めます。麦栽培はいちに排水、二に排水が大切です。野菜は当初、個々の野菜を商品として売るのではなく、活用者（消費者）の 1 年分の野菜を提供するということで、会費制の提携栽培でした。虫取りなどの援農に活用者が来ていましたが、「暮らしを考える会」との合流のころから、個々の野菜の商品取引に変わっていきました。当初、農産物を消費としてではなく「顔の見える関係」での提携運動として生産物の供給でしたが、有機農業や安全食品の広がりとともに、有機農産物という「特殊な」商品を売る商品取引へと変わっていき「顔の見える関係」は形骸化していきました。（商品関係でない生産者と消費者の関係づくりは、社会全体の関係性の変革なきところでは、ひとつの空想的願望活動であったか？と総括です）

数年前から、キラリもち麦の栽培・販売が始まりました。善通寺市が町起こし、農業振興として、もち麦（ダイシもち麦）の栽培に取り組みだしましたが、これと連動するかたちで、虹の邑は「キラリもち麦」の栽培を始めました。

もち麦栽培の広がりは、地域の振興に寄与します。それと同時に麦ご飯が広がれば、国民の健康増進に大いに貢献します。もち麦には水溶性の食物繊維（βグルカン）が豊富で、現代病のメタボ対策にはうってつけの食べ物だからです。さらにまた、もち麦ご飯の普及は西洋的食文化（マクドナルド的食様式）を変える力でもあるのです。

もち麦栽培は始まったばかりですが、地域の小さな農業者が農業を続けていけることを目指しています。（地域の農業は、崩壊状態です。一部には大規模農家も出現してきて成長していますが、ほとんどの農家は後 10 年もすれば壊滅です。農地の借地料はタダが相場になっています。中堅どころの農家も後継者不足で、70 歳前後が中心にならざるを得ない状況です。業としての農業、存在すれども、農村崩壊。）また、もち麦飯を普及して、健康食生活の実現を夢見ています。